



# 海外生活 レポート 48



三井田 さとみさん

仕事で2017年からタイ王国チェンマイに滞在。  
2021年3月から同国ランブーン県トゥンファチャー  
ン郡に通い始め、10月にはトゥンファチャーン郡に  
移住。

タイ王国のチェンマイにある縫製工  
場で管理者として働いていた頃に、新型  
コロナウイルスが発生し、工場が閉鎖せ  
ざるを得なくなりました。それを機に、私  
は中断していた機織りを再開し、最終的  
には「マットミー」と呼ばれる緋織(注1)の  
技術習得を目的にランブーン県トゥン  
ファチャーン郡にあるカレン族(愛称:パガ  
ヨー)の村での滞在を開始しました。当  
初は一ヵ月ほどの滞在予定でしたが、  
「マットミー」の奥深さから脱することが  
できなくなり(笑)、今なお村で製作を続  
けています。

パガヨーは「腰機」と呼ばれる原始的  
なスタイルの機(注2)を伝統的に使用して  
います。この「腰機」は、持ち運び可能な



腰にベルトを巻いて経糸を固定し、全身を伸縮させて織る



野菜が旬になると、持ち寄った料理が同じで笑い合  
うことも

の中で何か不足すれば辺りの材料で  
サッと作ってしまうのも、パガヨーの魅  
力です。主に頭を使う仕事に従事してき  
た私は、自然を相手に最小限の道具と  
身体を存分に使って生きる環境に全く  
不慣れで、今までの社会人経験は村では  
全く役に立ちません。「サトミはここでは  
何もできないね」と言われ、ただ悔しい  
ばかりでした。自然の中に放り出されて  
も、一人の人間として生きていける力を  
身に付けたい、そう強く思いました。



11月、村人たちは稲刈り、脱穀で、休みなく働く

## 土の香り漂う素朴なパガヨー生活



マットミーの模様をデザイン  
したら経糸をひたすら紐で  
括り続ける

新年、伝統衣装を身に纏い、  
お寺に集まる女性たち



ほどシンプルかつ必要最小限の道具で  
成り立っている一方、全身も機の一部と  
して機能させながら織るのが特徴です。  
布を自ら織って着用する習慣は、他の地  
域同様に、今の若い世代にはあまり残っ  
ていないように感じます。

特に「マットミー」は製作工程の多さ、  
所要時間の長さからベテランの女性た  
ちからも敬遠されがちで、村でも自ら  
括って(注3)染めて織る人は非常に少ない  
のが現状です。通常、この村の女性が着  
る伝統的巻きロングスカート「パーシン」  
には「マットミー」が必須、というのも  
「パーシン」の美しさは「マットミー」の  
色・模様で決まっているようなものなの  
です。「マットミー」の布を織っていると  
村の女性たちは皆、興味津々です。それ  
を見るとやはり「マットミー」はなくては  
ならない技術だと実感します。それゆ  
え、できる限り技術を継承し、「マット  
ミー」の布を未来に残していけるよう  
にと思っています。

さて、この村に来たばかりの頃、私は  
ここでは何もできない人間だと思い知り  
ました。例えば、大きなナイフでの新割  
り、火起こし、旬の食材を使ったパガ  
ヨー料理、稲作に畑仕事など。また、生活

私が憧れるのは、どんなに強い日差し  
の下でも遅く動き働くパガヨーの女  
性の姿や、親戚・ご近所同士の強い絆や  
助け合いの精神です。チェンマイと比較  
すれば相対的に不便さを感じる場面が  
多い一方で、パガヨーの村に入って感じ  
ることのできた豊かさは、緩やかに流れ  
る時間、自然の中の豊富な食材、簡素な  
生活に残る伝統文化や精霊信仰です。  
不便を不便と感じない豊かさ。それら  
に憧れ、少しでも自分もそうありたい  
と努力する日々は、きっとまだまだこの  
先も続いていくことでしょう。



村の女性はいつだって遅く美しい

(注1) 前もって色を染め分けた糸を用いて織り、色  
の違いにより模様を表す染色技法。  
(注2) 経糸を張り、それに緯糸を交わり通して、織物  
をつくる器具(機械)。  
(注3) マットミーの模様をデザインした後、模様とし  
て残したい部分に染料が染み込まないよう、  
染色前に経糸をビニール紐などでしばる作業。

**I N F O R M A T I O N**

タイ王国

面積	514,000km <sup>2</sup>
人口	6,617万人
首都	バンコク
言語	タイ語